

特集 他とかかわる力を育てる

音声からスタート 小学校から中学校への接続を考える

酒井英樹 (信州大学)



はじめに

小学校学習指導要領が平成 23 年 4 月に全面的に実施され、外国語活動が小学校 5・6 年生において週 1 回必修となります。本稿では、外国語活動を経験してきた学習者の特徴を考慮し、また中学校の入門期にも配慮し、他者とかかわり方の指導、英語の音声や基本的な表現の慣れ親しみの状態の診断、音声から文法構造への発展的理解について述べます。

他者とかかわること

小学校の外国語活動では、インタビュー活動やゲームなどを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が行われています。具体的には次の点が重視されています。

- Hello. や Hi. と、あいさつをしてから話しかけること。
- Thank you. See you. と、お礼を言ってから別れること。
- 男女関係なく、いろいろな人に積極的に話しかけること。
- アイコンタクトをしっかり行うこと。

生徒は他者とかかわる基本的な姿勢を身につけてくると考えてよいでしょう。中学校の学習が机に向かうものばかりだとしたら、小学校で培った態度を伸ばすことはできません。他者とかかわる活動を十分に取り入れることが重要です。

小学校外国語活動においても英語によるインタラクティブが行われています。一見すると、中学校で学ぶ英語表現が扱われているように見えます。

次の例をみてください。『英語ノート』（文部科学

省）の Book 1 Lesson 1 で扱われている英語表現です。この Ken と Mai のやりとりのように、児童は級友とのインタビュー活動を行います。

Ken: Hello. My name is Ken.

Mai: Hi. My name is Mai.

Ken: Nice to meet you.

Mai: Nice to meet you too.

それでは、中学校ではどのようなことに留意すべきなのでしょう。次は、NEW CROWN BOOK 1 の LESSON 1 です。

Kumi: Hello, I am Tanaka Kumi.

Paul: Excuse me?

Kumi: Kumi. K-U-M-I.

Paul: Kumi, I am Paul. Paul Green.

Kumi: Nice to meet you, Paul.

Paul: Nice to meet you too, Kumi.

下線を引いた表現は、小学校の外国語活動で扱われている表現とほぼ同じと考えてよいでしょう。NEW CROWN では、小学校で経験してきた自己紹介のやりとりを発展させて、英語で他者とかかわる方法を具体的に学んでもらいたいと考えています。Kumi はスベリングを言うことによって、正しく名前の言い方を伝えています。それだけでなく、Kumi と Paul のやりとりは、次の特徴を持ちます。

- 聞き取れないときには確認する (Excuse me?)。黙ったまま、やり過ぎさない。
- 相手の表現を繰り返すことで理解したことを示す (Kumi, I am Paul. と応答することによって、Paul は Kumi という名前の言い方を理解したことを示している)。
- 覚えた名前を会話に用いる (Nice to meet you, Paul.)。名前でひんぱんに呼びかけるこ

とは、コミュニケーションを円滑にする1つの特徴である。

このページに、「ペアになり、例にならってあいさつしよう。そして相手の名前をメモしよう。」という「話してみよう」の活動があります。この活動では、「Paulのようにもし聞き取れなかったら聞き返してみよう」や「覚えた名前を呼びかけながら対話を進めていこう」のように、他者とのかわり方を取り上げて指導したいものです。

英語の音声や基本的な表現の慣れ親しみ

小学校外国語活動では、ALTの英語や『英語ノート』などの音声教材を通して、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみます。中学校では、生徒がどの程度英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいるかを診断しながら指導していくことが必要です。

(1) 英語の音声の慣れ親しみ

小学校の外国語活動を観察していると、耳にした英語を上手に繰り返す児童がいます。一方で、あまり正確な発音が指導されていない場合も見られます。まずは、英語の単語や表現を知っていることを認めてあげましょう。その上で、より正しい発音を身につければ相手にメッセージを正確に伝えられると励ましながら発音指導を行います。

BOOK 1のGet Ready 4「単語の音とつづりに親しもう」では、アルファベット26文字と単語が示されています。26個の単語は、英語の母音と子音のほとんどすべてをカバーできるように選択されています。例えば、有声音のthの音はfatherに、無声音のthの音はmouthに含まれています。また、2音節以上の単語(astronaut, doctor, elephantなど)を使って、語のアクセントを意識させることができます。

これらの単語の多くは、『英語ノート』で扱われている単語です。生徒が慣れ親しんできた発音がどのようなものを診断できます。例えば、What's this? とたずねて各単語を知っているかを確認しながら、生徒の発音を診断します。あるいは、Repeat after me. と繰り返すように求め、教師の発音を正しく真似できているかどうかを確認しま

す。もし正しい発音を身につけていなければ、タッチングゲーム「英語を聞いて、絵を指でさしませよう」を行いながら、教師の正しい発音を十分に聞かせ、リズムに合わせた発音を練習させます。

(2) 基本的な表現の慣れ親しみ

1年のGet Ready 2「友達になろう」では、6人の登場人物の自己紹介を聞きます。ここでは、次のポイントについて診断できます。

- ・まとまりのある英語を聞くことに慣れているかどうか。
- ・基本的な表現に慣れているかどうか。

前者については、段々と長くなっていく自己紹介を聞かせながら、英語を理解しようとする姿勢があるかどうかを診断します。つまり、途中で聞くことをあきらめてしまうのか、あるいは聞き取れることを参考にしながら理解しようとしているのかといった生徒の姿を観察します。後者については、Kumiたちが使っている表現を使いながら、生徒の名前や好きなものを口頭で尋ねていきます。教師の質問に、どのように反応するのかを診断します。I like ～. という表現を使って答えるか、単語だけで答えるか、あるいは絵を指さして答えるかを観察します。

意味の理解から文法構造の理解へ

外国語活動では、『英語ノート』の音声やALTの話などを通して、まとまりのある英語を聞く機会も多くあります。児童は英語の意味を大まかに理解することに慣れていきます。中学校では、外国語活動で培った聞く力を踏まえて、「意味を大まかに理解することからスタートし、「詳細部分を意識しながら聞く」ことへ発展させ、文法構造の理解へつなげることが無理のない展開と言えるでしょう。

1年のLESSON 1～3は、「聞いて意味を理解すること」からスタートします（「聞いてみよう」の活動）。その後で、ポイント文を学んだり、「聞いてみよう」の音声で文字化された本文を読んだりしながら、詳細部分を意識させます。その上で、「聞いてみよう」の音声を聞かせます。このように、NEW CROWNは「意味の理解」から「文法構造の理解」へと指導できるような教科書になっています。